

## 不道德主義再考

——A. W. イートンの「ラフヒーロー」概念と想像的抵抗を中心に——

中西健

### 1. 美的な価値と道徳的な価値は（いかにして）関わるか？

ある芸術作品の道徳的な長所ないし欠点はその作品の持つ美的な価値に対して（どのように）作用するのか、という問いは近年再び盛り上がりを見せている。本稿ではこの議論の主要な一つである「不道德主義」(immoralism)、つまり芸術作品の持つ道徳的な欠点が「時に」作品の美的な長所になると考える立場について検討し、その中でも A. W. Eaton (以下、イートン) <sup>(1)</sup> が主張する「強固な不道德主義」(robust immoralism) <sup>(2)</sup> に着目、彼女の議論と既に指摘された問題点を紹介した後、その指摘に対する再反論を試み、不道德主義の新たなあり方を提案する。

### 2. 価値をめぐる様々な立場

#### 2-1. 自律主義、倫理主義、文脈主義

先に挙げた問題に対して、近年の議論では大きく分けて三つのアプローチが試みられており、またその中でも幾つかの主要な下位分類が存在し議論が進められている。三つの分類はそれぞれ自律主義 (autonomism)、倫理主義 (ethicism)、文脈主義 (contextualism) と呼ばれ <sup>(3)</sup>、これらの立場は、作品の道徳的価値によって美的価値に影響があるか、またあるとすればどのように影響するのかという基準で分類される。自律主義は最初の問いを否定する立場であり、つまり作品の道徳的価値によって美的価値に影響を受けることはないとする立場である。これに対して残りの倫理主義と文脈主義は、道徳的な長所ないし欠点が作品に美的な影響を及ぼすことを認める立場であるが、その影響が一定か不定かで区別される。まず倫理主義においては、作品の持つ道徳的な長所は「常に」美的な長所となり、道徳的な欠点は「常に」美的な欠点と

なるという、一定の影響の仕方を持つ。これに対して文脈主義は、道徳的な長所は「時に」美的な長所とも欠点ともなり、道徳的欠点は「時に」美的な長所とも欠点ともなるという、文字通り文脈次第で影響の出方が変わるという立場を取る。

この文脈主義は更に、どの方向性を強調したいかによって分類することができる。文脈主義の一つに位置付けられる穏健な道徳主義 (moderate moralism) と呼ばれる立場は主に、芸術作品の道徳的な長所は時に美的な長所となり、道徳的欠点は時に美的な欠点となることを主張し、道徳的欠点が美的な長所となるかどうかについては積極的に語らない<sup>(4)</sup>。これに対して不道德主義と呼ばれる立場は、芸術作品の道徳的欠点が時に美的な長所となることを積極的に支持する立場である。これら二つの立場は必ずしも対立するものではないが、その主たる目的は異なる。

## 2-2. これまでの不道德主義

不道德主義を擁護する為には、ある芸術作品における道徳的欠点が美的に貢献している事例を挙げる必要がある。例えばマシュー・キーランは、不道德な作品は人々に認知的な価値をもたらし、また悪を知ることが善を知ることにつながるため、結果的に道徳的でもあるとして、認知に訴える不道德主義 (cognitive immoralism) を展開した<sup>(5)</sup>。だがこれでは結局のところ不道德さが作品に貢献しているというよりも、そこから得られる道徳的な見識のために良いということになってしまい、道徳的欠点そのものが重要とは言い難い。道徳的な欠点それ自体が何かの利点になるということが一般的にも難しいため、不道德主義の擁護は簡単そうに見えて困難であるというのが現状である。

## 3. イートンの不道德主義

### 3-1. ラフヒーロー

不道德主義を支持する試みは必ずしも成功してきたとは言い難いが、その試みが放棄されたわけではない。イートンは主にフェミニズム美学で知られる研究者であるが、近年の映画やドラマでしばしば見られるような、道徳的に欠陥のある主人公に着目し、

これをラフヒーロー (rough hero) と呼び、彼らの持つ道徳的欠点こそがまさに作品を美的に良くしているとして、不道徳主義の擁護を試みている。

この言葉は元々ヒュームの「趣味の基準について」における記述に因むものであり、彼はこのエッセイで、ある詩の中で不道徳な振る舞いが咎められない場合、そのことは作品を損なうとし、「そのような荒っぽい英雄の運命や感情には関心を抱かない」<sup>(6)</sup>と述べ、不道徳な登場人物には共感できない上にするべきではないと言う<sup>(7)</sup>。これに対して彼女は、現代ではこのような荒っぽい英雄に共感できる作品もあるどころか、むしろ彼らに共感することが作品に特殊な美的達成をもたらすと反論する。

### 3-2. 様々なラフヒーローたち

元々ヒュームが“rough heroes”という言葉で表現したのは単に現在の目から見て道徳的でない振る舞いをする登場人物程度の意味だと考えられるが、イートンの場合むしろ積極的に不道徳さが強調され、かつ物語の主人公であるようなキャラクターのことがラフヒーローと呼ばれる。まずは彼女自身による特徴付けを確認したい。

ラフヒーローとは単に些細な欠点を持つ人物のことではなく、無法者や殺人者、性犯罪者であるなどの重大な欠点を持っており、かつそうした欠点は彼の人格と強固に結びついている人物である。そして彼らは望んで悪人であるのであり、作品も観客が彼らの悪を見逃すことを期待しているものではない。またこうした悪徳は、他の長所によって補われることがない<sup>(8)</sup>。こうしたラフヒーローの具体例として、イートンは幾つかの分類を行った上で紹介している。例えば「良く描かれた犯罪者」(the glorified criminal) というタイプには、「俺たちに明日はない」のボニーとクライド、「ゴッドファーザー」三部作のマイケル・コルレオーネなど、魅力的な人物ではあるが極めて悪質な犯罪者などが挙げられ、他にも「ロリータ」のハンバート・ハンバートなどが入る「魅力的な性犯罪者」(the likeable sex criminal) など、様々なタイプに分類することができる。だがどの分類においても彼らは根っからの悪人であり、「観客は主役の深刻かつ取り返しのつかない道徳的欠陥を強く認識する」<sup>(9)</sup> ことを求められているという点で共通している。

しかしラフヒーローは単なる悪役ではない。つまり彼らは本質的に悪でありながら

同時に「共感でき、魅力的で、賞賛すべき主役」<sup>(10)</sup>であり、多くの魅力を持っている<sup>(11)</sup>。簡潔に言えばラフヒーローとは、深刻な悪人であるにも関わらず一定の魅力を持つ主役である。

### 3-3. 想像的抵抗と美的達成

ではこうしたラフヒーローによって、不道徳主義はどのように擁護されるのだろうか。イートンはここで「想像的抵抗」(imaginative resistance)という概念を持ち出し、独自の主張を行う。これは、ある人がフィクションにおいて何かを想像する際、その内容に関して心理的な抵抗を感じ、想像することが不可能になるか、少なくとも困難になるという現象のことである。例えばあるSFにおける時間旅行の描写など、現実にはまだあり得ない事柄でも、我々はすぐにその描写や感情を想像できる。ところがある種の命題、特に倫理に関わるものに関しては幾分難しくなることが知られている。

イートンによれば、道徳的に問題のあるラフヒーローが魅力的に描かれている場合抵抗現象が生じ、我々はその魅力を適切に想像することが難しくなる。そのため通常彼らを魅力的に描くという試みは失敗してしまうのだが、優れた芸術作品は、観客にこの抵抗を乗り越え(overcome)させ、一定の魅力を感じさせることができる。イートンはこのことをラフヒーロー作品による一つの美的な達成(aesthetic achievement)と呼び、この達成に不道徳さは必要だと主張する。

さらに、我々がラフヒーローに共感する時、我々は彼らの悪徳を決して忘れたわけではない。イートン自身の言葉で言えば、抵抗を乗り越えたとしても「抵抗はあり続けたまま保たれ、その結果我々はその抵抗に引き続けられる」<sup>(12)</sup>のであり、それ故「ラフヒーローは我々の道徳信念に付け込むと同時に我々をその信念と対立させ、それによって私たち自身と対立させる」<sup>(13)</sup>ことができる。ここからイートンは、ラフヒーローによるもう一つの美的な達成に着目する。我々はラフヒーローに強い魅力を感じる一方で、彼の不道徳さに対する嫌悪感を持ち続ける。この両極端の感情の中で我々は言わば引き裂かれた状態に陥り、この両義的な状態(アンビバレンス)がまさに我々を惹きつける独自の美的な達成になるとイートンは主張する。以上の主張をまとめると次のようになるだろう。

- (1) 不道徳なラフヒーローを魅力的に描写することで受け手に抵抗が生じる。
- (2) しかしながら、ある種の優れた作品はこの抵抗を消すことはないが乗り越えさせ、ラフヒーローに魅力を与えることができる。
- (3) この魅力と、一方で残り続ける抵抗の間で受け手が陥る両義的な体験には、独自の美的価値がある。
- (4) この体験には(1)の想像的抵抗とその原因たる不道徳さが必要不可欠であり、それゆえ不道徳さが美的な価値を高めている。

#### 4. イートンの問題点とその解決

イートンが自身の不道徳主義に「強固な」と付けたのは、先に見たキーランの認知的不道徳主義などと違って、作品の持つ道徳的欠点がまさに作品を美的に良いものに行っているという強調のためである。だがこれについて何人かの批判者は、①そもそもラフヒーローを扱う作品は道徳的な欠点を持たない、②作品の質を高めているのは道徳的欠点ではなく別の要因である、という批判を行っている。以後その批判について確認し妥当性を確かめたい。

##### 4-1. ラフヒーローの不道徳性

イートンに寄せられる批判として重要なものの一つに、彼女が物語の文脈を無視してラフヒーローを論じているというものがある。確かに例として挙げるラフヒーローを見ると、その物語の中で幸せな結末を迎えたものは必ずしも多くない。ボニーとクライドは警官に撃たれて死に、マイケル・コルレオーネは不幸せな老後を過ごして終わる。このように、物語の文脈を考えればラフヒーローを扱うことで作品は道徳的な欠点を持つどころか、悪人は成功しないという道徳的なメッセージを伝えているとしてむしろ長所を持っていると言える。

ノエル・キャロルはこのことに関してイートンが「物語の誤謬」、つまり「あるキャラクターと彼らに対する我々の態度ばかりに注目し、その物語全体における立ち位置

に注目していない」<sup>(14)</sup>と述べ、悪人を魅力的に描くことは、我々に道徳的警戒が乱されやすいことを教えてくれるという意味で注意を促す、つまり道徳的に良い方向に働くこともあると指摘する。またパノス・パリスは、我々がラフヒーローに対して抱く好意や肯定的な態度は条件付きであり、段階的にそうした好意は損なわれるような期待がされていることが多いと批判する<sup>(15)</sup>。彼はラフヒーローが最終的に大成功を収め、それが望ましいことであるように提示される場合や、受け手がその成功を喜ぶよう要請される場合、我々は不快に感じるであろうとして、我々の好意は結局の所全面的なものでないと主張する<sup>(16)</sup>。

ベリス・ゴートをはじめとする多くの論者が認めるように、ある作品に殺人や盗みなどの不道徳な場面が描写されただけでは、その作品が道徳的欠点を持つことにはならない。多くの場合、ある作品が不道徳だとされるのは、作品がその描写を支持(endorse)するような態度を取るかどうかによって決まることが多い<sup>(17)</sup>。このことを踏まえると、ラフヒーローの登場や、彼らを単に好ましく描くことが即ち作品の道徳的欠点を意味していることにはならない。キャロルの指摘通り、イートンは文脈をあまり考えずにラフヒーローを抜き出して論じているとも言えるし、きちんと筋を追えば彼らの扱いから道徳的な意図を汲み取ることも可能である。

だが物語の筋で悲劇的な結末を迎えるからといって、彼らがいつも支持されていないわけではない。ボニーとクライドは確かに待ち伏せた警官に撃たれて死んでしまうが、そこに至るまでに我々は彼らが死んでしまう未来を案じて同情し、また彼らの逃亡を願うという反応を起こす。このことは作品の不適切な解釈とは言えず、むしろ作品が要請する態度とも言える。このように、彼女の挙げる作品の中には単に悪人を魅力的に描くだけでなく、適切に彼らを支持する態度を見せているものもある。確かにパリスが指摘する通りその好意や支持の一部は限定的であると思うが、「ハンニバル」で最終的に逃げ切るレクター博士のこと例など、いつでも当てはまるものではない。またキャロルの言う通り確かに「悪人に同情してしまうこともあるので危険だ」というメッセージを読み取ることもできるが、それは些か強引な解釈であり、また全ての作品に当てはまるものでもない。従ってラフヒーロー作品の中には適切に道徳的欠点を持つものもあると考えて良いだろう。

#### 4-2. 美的に寄与するもの

前述の通り、イートンはラフヒーローとその作品に備わる不道徳性こそが作品を美的に良くするものだと考えている。ところが実際に彼女の挙げるラフヒーローの魅力を見てみると、その多くは不道徳である所か、道徳と一切関わりのない特徴であることが分かる。レクター博士が持つ知的さや「パルプ・フィクション」のヴィンセントが持つセクシーさは、彼らの道徳的欠点とは何の関係もない。

また同様の批判がラフヒーローそのものではなく作品全体に対してもあてはまる。先にまとめた主張の(2)を見ても分かる通り、ここでのラフヒーローが持つ不道徳性の役割は、単に彼らを魅力的に描こうとする試みを困難にするものでしかなく、抵抗現象もまた、その困難を説明するだけの役割しか果たしていない。実際にその困難を解決するのは、先に挙げたような道徳とは無縁の魅力をうまく与えることができる、作り手側の技巧に過ぎない。

パリスとステアは共にこの点を指摘し、作品の道徳的欠点が結局の所、間接的にしか美的に貢献していないと批判する<sup>(18)</sup>。ラフヒーローというキャラクターが持つ魅力は道徳に無関係のものであり、彼らにそうした魅力を与えることができるのもまた、道徳とは無関係の技巧であるというのがこの批判の中心的な考えである。

後者の批判、つまり真に美的に貢献しているものは不道徳性ではなく技巧に過ぎないという自律主義的な指摘はイートンに限らず不道徳主義全般に当てはまることが多く、また効果的な反論も見込みづらい。悪人であることそのものに魅力があるわけではない以上、彼らの魅力が他の所にあると考えるのは当然である。他の不道徳主義と同じく、彼女の不道徳主義もこの点に関しては認めざるを得ないのではないか。

#### 4-3. アンビバレンス

もし仮にイートンの主張が(2)で終わっていたなら、先の批判は非常に深刻なものになっていただろう。ところが彼女の主張にはもう一つの側面があり、それは(3)の主張、つまり一方に魅力を感じながらも一方で抵抗を感じる時に生じるアンビバレンスに独自の価値があるというものである。この体験にはラフヒーローの持つ道徳的欠点が

不可欠であり、かつその欠点は経験の持つ価値を構成しているという意味で必要なものである。従ってイトンの批判者はこの主張についても検討しなければならない。

第一に、この現象が本当にあるのかという指摘が考えられる。先の批判と同じく、ラフヒーローの持つ魅力は彼らの道徳的欠点と無関係なものであり、彼らはただ長所と短所を持っているだけと考えるならば、彼女の言うような経験は起こり得ない。これについて彼女は、ラフヒーローの持つ道徳的欠点はその人格に深く結びついているため、単にこの点では好きだがこの点では嫌いといった事態にはならないとしている<sup>(19)</sup>。このような場合であれば、確かに我々が彼らに感じる好意と反発は共存し、そのアンビバレンスは生まれることが絶対にないとは言えないだろう。

この経験を認めたとしても、それにどの程度独自の価値を認めるかについては議論の余地がある。パリスは、イトンの言う経験が不道徳さを必要とし部分的に構成するならば、彼女の主張も認めうるとした一方で、道徳と無関係な欠点<sup>(20)</sup>でもそうした経験がありうるとして、不道徳さは「当該の価値ある感情的アンビバレンスを構成もしていなければ必要ともしていない」<sup>(21)</sup>と指摘し、不道徳性が原因のアンビバレンスに独自性を要求する。道徳に関係のない欠点でアンビバレンスが起これるという主張と、道徳的欠点でそれが生じるという主張は矛盾するものではないが、問題は不道徳性に由来する経験の独自性が足りないという指摘である。だがこの独自性という問題は、想像的抵抗が生じるかどうかによって解決することができるかもしれない。例えば「彼は金遣いが荒く貧乏だが思いやりに溢れ親切な人だ」という文章と「彼はシリアルキラーで女を殴るが思いやりに溢れ親切な人だ」という文章では後者の方が想像しづらい。この抵抗の大きさの違いによって結果的にアンビバレンスの強度が高まると考えられ、よってパリスが説明を求めるような、道徳的な欠点とそうでない欠点から生じるアンビバレンスの違いは、この抵抗とそれによる効果の強さと考えることができる。

以上より、不道徳性を単なる制作上の課題だと捉える(2)の主張に関してはイトンへの批判を認めることができるが、それを乗り越えた先に独自の経験があるとする(3)の主張に関しては妥当であり、よって不道徳主義の一つとしてその有力さを認められるという結論を導けるのではないだろうか。

## 5. 穏健な道徳主義との関係について

筆者はイトンの主張のメリットを、単に不道徳主義を擁護するだけでなく他の理論との架け橋になることだと考える。既に見た通り、同じ文脈主義に属する穏健な道徳主義と不道徳主義は互いに矛盾するものではない。前者の代表であるキャロル自身も積極的にこれを否定するわけではなく、またイトンに至っては自身の主張を穏健な道徳主義の補完であると明確に述べている<sup>(22)</sup>。これまでの不道徳主義は積極的にこの面を主張してこなかったため、対立する側面が主に強調されてきた。だが今回見た主張の前提にあるのは極めて道徳主義的なものである。ラフヒーローに魅力を与えることが困難な課題であるのは、そもそもそうした人物の不道徳さは我々に抵抗をもたらすからである。この点は穏健な道徳主義とイトンの主張が共に共有する前提であり、パリスもこの点から彼女の主張は道徳主義的であると批判する<sup>(23)</sup>。しかしこのことは彼女の主張を損ねるものではなく、むしろこの二つの立場を結ぶものとして積極的に評価できるのではないか。

最後にイトンが用いる想像的抵抗という現象についても触れておきたい。この現象は従来ほとんど道徳主義的な考えの下で研究されてきた。イトンの主張がユニークなのはこの抵抗現象を不道徳主義の擁護に用いている点である。既に見た通り、彼女の主張の一部では抵抗は文字通りの意味程度にしか捉えられておらず従来の考えと変わらないが、これを乗り越えた場合の事例を不道徳主義の根拠としたという点で独特であり、また抵抗現象の奥深さを示すものである。

### おわりに

近年の不道徳主義の動向の一つとしてイトンの強固な不道徳主義を取り上げ、検討し、道徳的欠点を一つの課題とする点では不道徳主義の擁護とは認められないものの、抵抗現象を乗り越えた先にある経験を根拠とした主張に関しては妥当ではないかと結論づけた。しかしながら抵抗現象と不道徳主義論争に関しては今回扱えなかったことも多く、筆者の今後の課題としたい。

註

- (1) Anne Wescott Eaton. イリノイ大学シカゴ校現教授。専門は主に美学やフェミニズム美学、イタリアルネサンス絵画など。
- (2) Eaton, A. W., “Robust Immoralism,” *The Journal of Aesthetics and Art Criticism*, vol. 70, issue. 3, 2012, pp. 281-292.
- (3) この分類は、Gaut, Berys, *Art, Emotion, and Ethics*, Oxford, Oxford University Press, 2007 に従った。文献によっては自律主義、道徳主義、不道徳主義という分類を中心にする場合もあるが、本論文では穏健な道徳主義と不道徳主義が必ずしも矛盾するわけではないという考えのもと、基本的にはこの分類を採用した。
- (4) 穏健な道徳主義の代表として挙げられるのは Carroll, Noël, “Moderate Moralism,” *British Journal of Aesthetics*, vol. 36, no. 3, 1996, pp. 223-238. など。
- (5) Kieran, Matthew, “Forbidden Knowledge: The Challenge of Immoralism,” in *Art and Morality*, ed. José Luis Bermúdez and Sebastian Gardner, New York, Routledge, 2003, pp. 56-73.
- (6) Hume, David, “Of the Standard of Taste,” in *Of the Standard of Taste and Other Essays*, ed. John W. Lenz, Indianapolis, Bobbs-Merrill, 1965, p. 22.
- (7) 共感「できない」のか共感「すべきでない」のかで話は大きく変わると思うが、本論文ではひとまず前者を重視し、共感できない、または共感できても極めて難しいものとして考えたい。
- (8) Eaton (2012), p. 284.
- (9) *Ibid.*
- (10) *Ibid.*, p. 285.
- (11) イートンによればこの魅力は概ね次の四つに拠る。①彼らにはしばしば人情深く理想化された特徴が備わっている。彼らは上品で、ウィットに富み、知的であることがあり、またそうした魅力が俳優によって高められている場合もある。②物語の悪役の方が、ラフヒーローよりも不道徳なことがあり、その対比で彼らの立ち位置が相対的に向上することもある。③不道徳ではあるものの、彼ら自身の道徳的な線引きがある。そして最後に、④我々自身が善とされる力に反感を覚えるようになることもある。( *Ibid.*, pp. 283-284.)
- (12) *Ibid.*, p. 287.
- (13) *Ibid.*
- (14) Carroll, Noël, “Rough Heroes: A Response to A. W. Eaton,” *The Journal of Aesthetics and Art Criticism*, vol. 71, issue. 4, 2013, p. 372.
- (15) Paris, Panos, “The ‘Moralism’ in Immoralism: A Critique of Immoralism in Aesthetics,” *British Journal of Aesthetics*, vol. 59, no. 1, 2019, pp. 18-19.

- (16) *Ibid.*, p. 19.
- (17) Gaut, Berys “The Ethical Criticism of Art,” in *Aesthetics and Ethics: Essays at the Intersection*, ed. Jerrold Levinson, Cambridge, Cambridge University Press, 1998, pp. 182-203.
- (18) Stear, Nils-Hennes, “Immoralism is Obviously True: Towards Progress on the Ethical Question,” *British Journal of Aesthetics*, vol. 62, no. 4, 2022, pp. 621-622. また Paris (2019), p. 23.
- (19) Eaton (2012), p. 287.
- (20) パリスが例に挙げているのは、愚かだが好ましいようなキャラクターであり、彼はこの場合にもアンビバレンスが起ころうと指摘している。(Paris, 2019, p. 22.)
- (21) *Ibid.*
- (22) Eaton (2013), p. 376.
- (23) Paris (2019).